

論文審査の結果の要旨

2022年 7 月 6 日

申請者：DL2015-102 顔 欒蘭

論文題目：中国の大学日本語教育におけるピア・リスニングの実践研究—日本語専攻生を対象に—

研究の背景に、中国の大学での日本語専門におけるリスニング授業の現状と位置づけがある。近年、外国語教育理念の進展に従い、中国の大学外国語専門教育においては「協力」、「創造」、「自律学習」などの能力の育成が重要視されるようになった。一方、多くの大学では、従来型の教師による一方向的な指導が行なわれており、前述したような能力の育成は困難な状況にある。このような背景を踏まえ、申請者は「教師主導型」による授業の問題点の改善を目指し、ピア・リスニングを中国の大学での日本語専門聴解授業への導入実践を試みた。実践により、学習者間のピア活動はどのようなプロセスで行なわれているか、さらに、ピア・リスニングの導入が学習者の認知面と情意面にはどのような影響を与えるのかを明確にした。論文審査と口述試験の結果、合格と判定された。以下、その詳細を述べる。

学位申請論文は、着実な実践と観察分析を通して独自性のある結論を導くことに成功したと考えている。論文では、新しいリスニング授業の展開方法を提示した。ピア・リスニングを取り入れた授業を実践1（第4章）と実践2（第5章）に分けて実施した上で、発話データの収集・処理・分析を加えた。さらにアンケート調査（第6章）を実施することにより、中国の大学でのリスニング授業効果の改善への有効な展開方法への提案を示すことができた。

次に、申請者は3つの研究課題を立てた（第3章）。それは、「ピア・リスニングを取り入れた授業において、学習者はどのようにピア活動を行なっているか、どのような活動が学習者の認知面、情意面に役立つか」（研究1）、「認知面と情意面に役立つピア活動を促すことにより、学習者の両面にどのような変化が生じるか」（研究2）、「学習者はピア・リスニング授業の効果、授業後の認知面と情意面の変化をどのように受け止めるか」（研究3）である。

研究1（第4章）については、ピア活動における、①進行指示→②解答提示→③理解構築→④解答議論→⑤解答形成→⑥理解拡大という6つの段階を踏むプロセスを解明した。その結果を踏まえ、ピア活動をタスクの解決結果により、合意正答、合意誤答、各自別答の3種類に分け、それぞれが導き出されたプロセスにおいて、認知面と情意面に貢献した活動のパターンなどの考察結果を得た。これは堅実な研究の成果だと考えている。

研究2（第5章）では、実践2の全授業における全ての話段でのタスク解決結果から、合意正答の比率が上昇していたのに対し、合意誤答及び各自別答の比率が下降していたという分析結果が出た。その結果を踏まえ、実践対象者の参与した話段への分析・考察により、対象者のピア活動への取り組み及びタスク解決手段における変化がその原因であることを明らかにした。そこから、認知面ではピア活動を通した「語彙や統語に関する知識の増加」、「推測ストラテジーの意識的な使用」、及び「テキスト内容への理解」が促されたこと、情意面では学習者間のピア活動が「学習への動機づけ」及び「協力的な意識」を高め得るという考察結果が示された。

これらの考察結果に至るまでのピア活動における学習者間の相互活動のプロセスと、学習者の聴解内容への理解構築の過程、及び授業後の学習者のピア・リスニングを通した学習成果・課題などに関する内省によって、リスニング授業を捉えなおす過程が記述されている点は、斬新な観点であると評価できる。ただし、実践授業では、グループ編成の際に対象者の語学力などの面における差異を考慮に入れることで、ピア活動を通した学習効果がより顕著に現れ、結論に至る考察もさらに緻密なものにできたと考えている。また、申請者は授業における教師の学習者との関

わり方についての知見を口述試験において示したが、それを論文の中で検討すると、さらに説得力が増したと考えられる。

研究3（第6章）は、実践対象者による授業の感想・評価の調査である。ここで申請者は、実践授業1・2を受講した対象者に対し、アンケート調査を実施した。そのアンケートは「ピア・リスニング授業に対する感想」、「ピア・リスニング授業への取り組み」、「ピア・リスニング授業を通しての変化」、「アドバイス」の4つの調査項目で設定し、5段階評価、選択問題及び自由記述などの質問への回答結果に基づき、分析・考察した。その結果、両実践の対象者は授業の効果に対して肯定的な評価をしていた。また、実践2の対象者は、実践1の対象者と比べ、ピア活動に対してより肯定的な意識を持っていたこと、ピア活動への取り組み意識・意欲が強かったことが分かった。さらに、両実践の対象者は「理解構築の方法」、「語彙や文法知識」、「聴解ストラテジー」、「協力の方法」など、実践2で明らかにしたピア活動のさまざまなメリットを意識していたことが示された。

最後に、研究のまとめと研究の意義（第7章）を示し、ピア・ラーニングの理念に基づくピア・リスニングを導入した授業が、教師による一方的な授業の代替となり得るという主張と、授業方法への提言を述べた。申請者の着実な実践と観察分析は、学位申請論文を次のような意義をもたらしたと考える。

第一に、中国の大学における日本語専攻の聴解授業へのピア・リスニングの導入方法を示した。

第二に、ピア活動プロセスの分析において独自性を持った研究方法を取り上げた。

第三に、今後の聴解授業におけるピア・リスニングの導入に向けての方向性を示した。

以上のように、申請者はピア・リスニングの日本国内外の先行研究を踏まえ、中国の大学の日本語専攻生を対象に、聴解授業にピア・リスニングを導入する方向性、必要性、信頼性を示した。中国の大学での日本語専攻生の普遍的なニーズとも言える、全体的な言語能力アップと学習ストラテジーの習得において、申請者なりの解決方法を提示した。学習者の認知面と情意面に影響を与える要素についてさらに実践と研究を深めることを通して、中国の大学における日本語専攻生を対象としたリスニング授業効果の改善のための実践と理論の充実が期待できる。

審査員（主査） 王 樹義 _____

審査員（副査） 杜 鳳剛 _____

審査員（副査） 吉田 朋彦 _____

審査員（副査） 陳 岩 _____